

# 生活指導をどうとらえているか

250322理論研学習会

内田 理

## 「集団づくり」という言葉について

いろいろな経緯がありましたが、「集団づくり」という言葉が生活指導実践とは異なる文脈で、方法論に傾斜し、一人歩きし、人によってイメージをいろいろ膨らませて語られてきたととらえています。

その結果、実践上の課題が方法論に偏ったり、子ども若者の現実、困難に十分向き合えなくなっているのです。私は「集団づくり」という言葉を使いません。

ただ、「集団づくり実践」としてなされてきたことの中には、人と人をつなげ、関係性を深化させ、自他認識を深めさせる手法がいくつもあることは事実です。それは生活指導として重要な要素でもあります。

藤本さんの「集団づくり」批判に概ね賛同します。

今回の参考文献になる「新生活指導の理論」のP88～には、教師と生徒の間での指導とケアについて書かれてはいるが、生徒同士の話は後の章に書かれている。教師生徒間の関係性と生徒同士の関係性はつながっているのです。ここでは「新生活指導の理論」には触れません。

## 生活指導とは何をする事？

私は生活指導を、(子ども若者たちが)活動の中で、関係性を深化させ、他者を発見し、他者認識を深めるためになされるものととらえています。これができることは、自己を相対化し、自己認識を深めることにもつながり、多様な人がいることへの理解につながります(自他認識)。逆に、できなければ世の中に、多様な他者がいることへの想像力も働かずに、序列化し、差別的物語が幅をきかす社会(物語)への疑問も生まれにくいでしょう。18歳を市民にするには、ここを意識する必要があります。

では、生活指導が成り立つために何が必要なのでしょう。まず、安心して自分のことを表現する場所が必要です。学校はなかなかそうはなりにくい空間かもしれません。そして、生徒たちが当事者として関われる活動が必要です。そのような活動の様々な場面で、対話し、他者を発見する機会が生まれます。活動の中で当事者にとって見えている世界が広がり、学びにつながればなお良いと思います。(集団づくりが自治活動をつくることを目指し、藤本卓さんが「世代の自治」を主張したことがつながってはいます。)

関係性を深化させ、他者を発見し、自他認識を深めさせるには、はじめに指導する側(教師)がまず問題を内在化したり、「問題」を生徒個人に「全体化」することなく、相手を理解しようとする対話をつくる必要があります。また、活動を進める中で、どのようなコミュニケーションがなされ、どのような関係性が生まれているのかを見て、必要な(他者を発見し、他者認識を深めるための)働きかけをする人が必要です。①

## 対話・相互応答について

対話は、相互に応答してなされますが、私は相互応答の中に、相手への理解・学習が必要だととらえています。ケアも相手への理解学習が進まなければ、成り立たないのでは無いでしょうか。高みから相手の問題を分析・理解することを、専門家は(教師も)よくやるわけですが、それだけで相互の理解・学習が無ければ本当のケアにはならないということは、ナラティブアプローチなどの論考が示しています。当事者主権という言葉も、この視点とつながっています。

相互理解・学習とコンテクスト(文脈)把握のつながりを、安富歩の論考をもとに触れます。対話相互応答するとき、相手の発した言葉を受け取った人は、相手の表情や声のトーンなど非言語メッセージおよび、その場の支配的物語・文脈などから情動反応して感情を生み、その言葉がどのようなコンテクスト(意味・文脈)で話されているのかを把握(学習)しています。相互応答が進

み、相手の言葉のコンテキストが理解され、自分のことを理解・学習しようとしている、自分のことを聴き取りニーズに応答しようとしていることがわかれば、自分も相手を理解・学習しよう、相手のことを聴き取ろうとするでしょう。そのような相互理解学習の要素がなければ、相互応答があっても関係性の深化にも、他者理解へと進まないと考えられます。

また、この過程を利用して、逆に相手に誤学習させ支配したり誘導操作することも可能になります。(→ハラスメント、心理操作) ②

多くの教師が指導するとき、指導する生徒にどんな問題があるかを示し、それを直させなければという文脈(コンテキスト)で話をしています。このコンテキストで話される場合、生徒の言葉はあまり聴き取られず、相互の理解・学習は成り立たません。生徒は学校・教師は人の話を聴き取らず一方的に自分に何かを押しつけてくるところと学習します。これを生徒たちは言葉にできなくても、教師の言葉のコンテキストを感じ取っているので、聞き流すか、聴いている振りだけすることを身につけます。このコンテキストでは対話は生まれにくいわけです。③

### 関係性を読み取り深化させること

渡部実践の読み取り分析については、藤本さんの論考に大筋賛成です。別の視点からの分析をここでは示したいと思います。

この実践は、定時制4年次(1学年1HR少人数)での実践です。しかも、HRのほぼ全員が小中不登校経験者です。他者への恐れを持ち、他者との関係を容易にはつukれない者や、狭い関係の中に閉じこもりがちな者もいたでしょう。さらには、学習面での困難をかかえている者、家庭の条件が厳しい者もいたでしょう。それに対して、渡部は1年次から生徒と対話し、様々な仕掛けをつくり、行事の活動をつくってきました。これらの活動の中で、彼らは様々な対話をし、関係性を深めてゆく機会を持っていたと推定されます。それがあから、4年次に219号の報告にあるような、渡部の国語の授業を使つての言葉のやりとりが可能になり、修学旅行でのHの変化成長などが生み出されています。

生活指導をつくるときに、生徒たちがつくる関係性について、それを読み取ること、活動の中でどう深化させるのかという視点を持つことが重要だと考えます。生徒達の関係性は、日常の会話中、活動中での言動・行動に表れています。④

渡部は、IとHのトラブルから、感情を表す言葉を可視化することで、生徒達の関係性をさらに深化させることをもくろみ、成功させています。

①「全体化」の問題は、内在化の形態のひとつですが、学校ではよく教師によってなされ、生徒たちを苦しめています。このことを但馬徹哉さんが臨床教育学会誌に論文投稿しています。「文学の授業が子どものためにできることは何か? —『少年の日の思い出』をハラスメント論から読む—」(2025)この論文には、「全体化」の意味とそれに対する生徒の反応が出てきます。また、この論文はハラスメントについて、よく整理されて書かれてもいますので、理論・実践研究グループでの学習会で取り上げてほしいと思っています。

②この部分は、2019年名古屋大会問題別分科会3「生活指導をコミュニケーションと関係性の視点から捉え直す」(内田理)で詳しく論じています。

③この部分は「新生活指導の理論」のII章とIII章で詳しく論じられていますが、コンテキストの把握学習という視点は乏しいのです。

④生活指導実践と教師—生徒の、生徒同士の関係性の問題は、2022年沖縄大会問題別分科会3「関係性の深化という視点から生活指導実践を見直す」(内田理)で、和光の本多菜美さんの実践をもとに詳しく論じています。